

苦農から酪農(楽農)への道のり

—酪農歴50年を目指して—

村山昭雄さん・裕子さん(酪農経営・北海道足寄町)

地域の概要

村山農場のある北海道足寄町は、十勝地方の東北部に位置し、東西66km、南北41kmに広がった1408.120km²という広大な行政区域を有している。農用地は、足寄川、利別川、美利別川の3河川流域に沿って帯状に分布しており、山麓特有の気象現象と内陸性気象の影響を受ける二重の気象条件となっている。

このため、四季における寒暖の差が著しく夏は比較的暑く、冬は積雪寒冷の条件下にある。土壌は泥炭土壌と火山灰土で覆われ、地形は山麓丘陵地帯特有の傾斜地の多い地帯となっている。これらの条件下のため経営面積が狭あいであり、かつ土地の生産性が低いため畜産業が盛んとなっている。

乳牛、肉牛を合せた飼育頭数は1万9000頭、そのうち黒毛和種経産牛頭数は3096頭、馬の飼育については(^{ばんけい}輓系馬152頭)と、随一となっている。

平成16年に「放牧酪農推進のまち宣言」を行い、中山間地域特有の広大な草地を活用した足寄町ならでの放牧経営を推進している。畑作農家も多く豆類、てん菜、馬鈴薯、小麦などが挙げられ、近年では野菜栽培も増加傾向にある。

経営の概要

経営主の村山昭雄さんは、北海道十勝東北部に位置する足寄町において、入植2代目と



村山昭雄さん、村山裕子さん

して後継した。しかし、昭和56年に不慮の農作業事故で重傷を負い9ヵ月間の入院を余儀なくされた。妻と母により経営継続したものの、負債は増加し、一時は負債額1億円に迫り破産状態となった。国の負債整理資金等によって経営を存続できたものの、経営の好転は思うように進まなかった。

転機となったのは、地域で平成8年に7戸で組織された「足寄町放牧酪農研究会」に参加し、土地を活かした自給飼料重視型経営に転換したことによる。

平成9年に集約放牧酪農技術実践モデル事業を活用し、牧柵や牧道の整備により先進的な輪換放牧への転換を図った。徹底した経営の見直しと研究会仲間との放牧技術の研鑽習得があいまって、経営改善が大きく進展した。

その結果、放牧研究会参加から14年を経た平成22年に負債額がゼロとなった。多額負債からの脱却は、「決してあきらめない強い決意」と「支えてくれた家族・仲間と支援者」があって達成できた成果である。



冬も可能な限り舎外で飼養



冬も畜舎内は清潔

なお、平成23年には農業近代化資金を借入れ、育成牛舎を新築した。

現在では高い所得率(平成24年実績:37.2%)を誇り、地域の先進的な経営として評価されている。

集約放牧と経営分析による負債からの脱却の取り組み

平成8年に放牧酪農研究会に参加し、平成9年には前述のとおり、国の集約放牧酪農技

(表1) 経営実績 (平成24年度)

経営概要	労働力員数(畜産・2000hr換算)	家族・構成員	2.0 人
		雇用・従業員	0.0 人
	経産牛平均飼養頭数		55.5 頭
	飼料生産	実面積	9,200 a
	年間総販売乳量		420,500 kg
	年間子牛販売頭数		23 頭
	年間育成牛・初妊牛販売頭数		15 頭
収益性	所得率		37.2 %
	経産牛1頭当たり売上原価		572,234 円
生産性	生乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量	7,577 kg
		平均分娩間隔	15.2 カ月
		受胎に要した種付回数	2.6 回
		平均産次数(期首)	4.0 産
		平均産次数(期末)	4.0 産
		牛乳1kg当たり平均価格	82.1 円
		牛乳1kg当たり生産原価	41.6 円
		乳飼比(育成・その他含む)	22.7
		乳脂率	3.70 %
		乳蛋白質率	3.20 %
		無脂乳固形分率	8.70 %
		体細胞数	29.5 万個/ml
		借入地依存率	0.0 %
		飼料TDN自給率	64.9 %
		乳飼比(育成・その他含む)	22.7 %

(表2) 負債と収益の年次推移

項目	昭和61年	平成8年	平成15年	平成22年	平成24年
売上高負債比率	281.0	99.0	68.9	0	20.0
経産牛1頭負債	1620	623	467	0	188
経産牛1頭所得	-128	121	149	272	349
所得率	-22.4	20.3	21.9	40.3	37.2

(%, 千円)

術実践モデル事業の導入により、電気牧柵3645m、牧道385m、事業費802万8000円規模の牧柵・牧道の整備を行った。

経営転換にあたり、購入飼料依存の飼料給与を見直し、補助事業による輪換放牧の導入への投資(牧道整備、電気牧柵整備、給水施設)を行い、土地条件を生かした放牧酪農への転換を実施した。

現在、放牧は牛舎周辺の28haで行っており、チモシー、ケンタッキーブルーグラス、メドウフェスク、ホワイトクローバの混播放牧地としている。牧区は、①約15haが1牧区(10日間)、②約3ha(3～4日)が3牧区の4区分であり、年間で10回転させる。放牧期間は4月下旬から11月末まで昼夜放牧を行う。

採草は62haで行っており、うち兼用地9.4haは一番草をサイレージ、7～11月は搾乳牛の放牧地としている。18.7haはチモシー主体の採草地としサイレージ、乾草を生産している。なお、乾草は販売にも向けている。

草地更新は概ね8～10年で更新し、毎年5～6haを順次行う。この地域の土質は石が多く出るので大型機械が必要である。



放牧酪農の魅力をアピール



平成23年に新設した育成牛舎

これらの取り組みにより、以下の経営改善が図られた。

①バラ線での囲いから電気牧柵によって、脱柵、乳房損傷がなくなった。

②牧場の中央に牧道を設置することによって、傾斜地の専用放牧地への移動が効率化された。牧区移動がスムーズとなった。また、牧道設置によって蹄、乳房を清潔に保ち、牛追いの時間が短縮され、朝夕の搾乳時間に合わせて牛は自分で帰ってくるようになった。

③夏季の昼夜放牧によって飼料給与 畜舎清掃 飼養管理が改善された。

④放牧によって糞尿処理が直接還元されるので、その処理と散布作業が削減される。

⑤牛、草、土づくりという断片的な技術が放牧によって結合された。

⑥放牧専用地の草づくり、放牧に会う草種を選択した（オーチャードグラス主体→チモシー主体→メドウフェスク主体）。

⑦放牧は牛をコントロールするのではなく、草をコントロールすることを学んだ。

濃厚飼料は、夏季は牛を牛舎に入れるための一日2kg（朝夕2回）に給与を限っており、

他の経営よりも少ない（放牧酪農への移行前は7～8kgの給与を行っていた）。これにビートパルプを2kg給与している。冬季は濃厚飼料4kg、ビートパルプ4kg、サイレージ11～12kgを給与している。冬季においてもパドックに出し、ラップサイレージを飽食させる。

「放牧酪農研究会」では、研究会の全員が北海道畜産会（現北海道酪農畜産協会）の経営分析により、個々の経営の問題点を明確に把握し、会員互いが経営実態をさらけ出し切磋琢磨し経営改善に取り組んだ。経営分析に基づく経営改善目標の設定によって経営の見直し、研究会仲間との放牧技術の習得があいまって経営改善が大きく進展した。

地域への貢献

自ら長い歩みの体験から、地域の新規就農者の良きアドバイザーとして地域を支えている。平成25年8月には「北海道放牧酪農ネットワーク交流会in足寄」でのフィールド牧場として多くの参加者へ、放牧酪農の魅力を大いに発信した。同年、放牧畜産の先駆的取り組みが高く評価され、日本草地畜産種子協会

（表3）生産実績の推移

年次	昭和52	56	63	平成2	8	9	22	23	24
生産量（t）	100	165	214	243	294	335	370	381	420
経産牛（頭）	20	30	34	43	47	54	54	60	56
草地面積（ha）	40	60	67	67	72	72	87	92	92
乳飼比（％）			32.2	29.0	33.3	28.4	24.8	24.4	22.7



タワーサイロ

の放牧畜産実践牧場としても「認証」を受けた。

足寄町では戦後開拓68年余年を経過し、経営が3代目世代に引き継がれようとしている。1代目は開墾からはじめた基盤整備 2代目は設備投資と生産性の向上と生活の安定に努力し続け、その苦闘不屈の精神が地域社会を守っている。

近年、北海道農業においては離農に歯止めがかからず、酪農の現場においても例外ではない。対策として新規就農を強化・推進し、多様な理由で経営不振に喘ぐ生産者の改善支援指導による経営戸数の維持存続が実施されてきた。

本牧場が実践してきた道のりは、地域における離農の問題に対しても大きなヒントを与えてくれる経営として今後とも期待されている。具体的には以下の活動を行っている。

①平成12年からの中山間地域等直接支払交付金制度にかかわる集落の組織、柏せせらぎ会の会長として、農地の多面的機能の維持と遊休農地の防止に努めている。



ラップサイレージ

②平成15年から放牧酪農研究会、町が中心になって「北海道放牧酪農ネットワーク交流会in足寄」を毎年開催し、記念すべき10回目は当牧場での現地研修交流を行った。視察者の受け入れなど全道に放牧酪農の情報発信を続けている。

③新規就農者の受け入れを積極的に支援しており、今までに13組が実現に貢献している。

④世代交代が進む中で放牧酪農研究会の副会長として会長を補佐している。

「涙なしでは語れない」貴重な経験を、新規就農者に伝えることができる、良き相談相手である。特に、何故借金はへらないか？の心境について自らの経験から「経営は人なり」で、別の見方をすれば人間の性格の弱さを表している。

⑤放牧に関する研究に協力しており、放牧酪農推進への実践牧場として、帯広畜産大学生の卒論「連続放牧における泌乳牛の行動と草地の利用性」、北海道農業研究センターによる、「簡易GPSでの放牧牛の行動把握」、酪農学園大学の卒論「足寄放牧酪農の総合的評価」などに結実している。

⑥後継者は、本別の農業大学校卒業後、酪農サブヘルパーとして活動してきた。困った時の助っ人として仕事内容が認められ、専任ヘルパーとなり地域の酪農家に貢献している。また、ビート収穫時の運搬作業など広範な農

作業にも従事してさまざまな経験を蓄積している。

経営に対する支援活動

(1) 第3者機関による経営分析

今までに6回 北海道酪農畜産協会の経営分析と助言を受けている。その経験を生かしての経営の見直し、「借金は隠せば増える」情報を公開して対策を考えることが重要と認識した。実績をふり返って適切であったかどうかを反省して経営の総合的分析と発想、方策についての具体的に検討することが経営改善の糸口である。

(2) 北海道の独自システム「組合員勘定」の鉄則

「貸越勘定であり赤字を出すな、単年度収支を、歯をくいしばって頑張ること」。これをしてしないと単年度の赤字が雪だるま式となり負債が増え大変なことになる。

(3) ムードに溺れることなく、自主・自立性ある経営を目指す。

(4) 経営の物事には限界もある、自分の能力に合わせて限界があることを知るべきである。

家族の支え

(1) 妻としての経営管理面での役割

妻の裕子さんは静岡県の出身で、何事にも活動的である。主に月々の経営収支管理を行っている。生産部門では搾乳作業と哺乳牛管理を担当し、繁殖管理など乳牛の改良への基礎データを記帳している。また、1番草収穫時には、トラクターに乗り軽作業もこなす。

(2) 昭和56年経営主の農作業事故での経験

ヘルパー制度がない時代での最大のピンチであり、裕子さんは離農を覚悟した。しかし、

長期間の療養時でも実家に戻ることなど考えなかったという。子どもを実家に預けて義母と女2人で危機を乗り越えた（ピンチこそ夫婦愛が強まる）。その後の負債増加による経営圧迫、家計費のやりくりなど、厳しい経営環境に悩みながらも3人の子どもを育て自立させた。

特に負債整理資金借入時には家計費削減への創意工夫で乗り切るなど経営の幾度かの危機を持ち前の活発さで乗り越えてきた。

将来の方向性

昭雄さんは酪農歴50年を目指して現役で活動している。20歳で経営に参画し、現在65歳、後継者はいるが70歳まで現役で続投することに決め、50年を契機に後継者への経営移譲を予定している。

魅力ある酪農ライフスタイルとして、以下の実現を目指している。

- ①放牧システムの価値 応用
- ②主婦を主たる労働力からの解放一夫婦2人で1日5時間労働
- ③経営者としてのやりがい
- ④余暇と休日の確保と、ゆとりある生活の保証
- ⑤安定した酪農経営
- ⑥新規就農者に「やる気を起こさせる」部落づくり
- ⑦家畜福祉の充実一牛を牛らしく牧場の環境整備

以上のように、村山さんは酪農歴50年を経て、息子への経営移譲を視野に入れている。後継者には、親の姿を見て3代目として理想郷を求め、ゆとりある酪農を実現するための放牧酪農システムを確立して欲しいと思っている。